

日中戦争における東アジア

特集にあたって

中国現代史研究会 2013 年度研究集会におけるシンポジウム「東アジアにおける日中戦争」の会場は、研究会史上はじめて名古屋に移り 3 月 17 日、金山プラザホテルで開催した。冒頭に趣意書を掲げる。

日中戦争における東アジア

まずここでは日中戦争を、狭義の意味での 1937 年 7 月以後 1945 年 8 月までの時期として使用する。また日中戦争の拡大として、1941 年 12 月以後、アジア・太平洋戦争が行われたが、日中戦争という用語の中に、アジア・太平洋戦争の時期と地域を含む。したがってここでいう東アジアは広く指せば、当時の日本が使用した「大東亜」の地域とほぼ同一の地域として考える。

日中戦争開始までに日本は、「帝国」内部に東アジアの台湾、朝鮮、「満洲」を組み込んでいた。中国本土および他のアジアの諸地域は、「帝国」の外部にあった。

本シンポジウムでは、この「帝国」の内外での日中戦争について共通なコンセプトとして「動員とそれによるアイデンティティの変容と抵抗」を切り口にして議論を行いたい。ところで動員の意味は、日本側による動員と、中国の抗日根拠地で行われたような抗日側の動員の両方を含むし、直接的な政治、軍事動員のみならず、文化による緩やかな動員＝協力も含む。

アイデンティティについては、当時の台湾、朝鮮では一方で大日本「帝国」の「臣民」としての日本人化のアイデンティティとともに、中国人（台湾人）、朝鮮人のアイデンティティが存在する。すなわち日本人化のアイデンティティと各民族のアイデンティティが相克していた。台湾の「高砂族」の場合は、先住民としてのアイデンティティが存在し、日本人アイデンティティは無論、中国人（台湾人）アイデンティティとも一致せず、それらに翻弄された。

一方日本軍が攻め込んだ中国の華北では、日本が「東方の文化道徳の発揚」「東亜新秩序の形成」を唱え、傀儡政権は、中共や国民政府などを伝統文化、秩序を破壊する勢力として批判し、新暦を使用するとともに、農曆の伝統的祭祀や諸節句、廟会などが復活するなど民俗を利用し、農民の動員をはかろうとした。中共も各抗日根拠地で農民を抗日に動員しようとしたが、その場合に最初は国民政府の記念日構成を行っていたが、その後新暦

とともに傀儡政権に対抗して、農曆の民俗の新暦の時間への採用等を行っていった。これらの民俗利用の政治動員について農民による基層の民俗のアイデンティティは、両政権に対して、変容と民俗改造への抵抗でもって対処した。

一方タイは、もともと「帝国」の外部にあり、アジア・太平洋戦争後、日本と「同盟国」となった。そこで日本側の文化宣伝によるタイ側への緩やかな動員指向＝協力指向、とりわけ相互の文化の独自性を超越した「東亜文化の興隆」論に対して、タイ側がタイと日本の文化の相互の独自性を強調し、自らの文化のアイデンティティの保持でもって接した。

以上のように日中戦争の東アジアにおける「帝国」内外の多様な影響を、共通なコンセプトとして「動員とそれによるアイデンティティの変容と抵抗」を切り口にして議論したい。すなわち歴史学の問題として、日中戦争史を「侵略と抵抗」の二項対立から解放し、各地におけるより多様性を持ったものとして具体的に議論したい。

本年は4名のパネリストが報告したが、パネリストと報告題名、コメンテーター・司会・コーディネーターは以下の通りである。シンポジウムの参加者は42名であり、報告及びコメントを踏まえ活発な討論が行われた。

パネリスト

丸田孝志（広島大学）

「時間を巡る日中戦争—満州国・華北傀儡政権・中共根拠地の時間とセレモニー—」

菊池一隆（愛知学院大学）

「台湾原住民から見るアジア・太平洋戦争—高砂義勇隊の実態と歴史的 position—」

三ツ井崇（東京大学）

「揺らぐ『内鮮一体』像—日中戦争期朝鮮『皇民化』政策と知識人—」

加納寛（愛知大学）

「戦時下日本の対タイ文化宣伝」

コメンテーター

柴田哲雄（愛知学院大学）

西村成雄（放送大学）

司会兼コーディネーター

馬場毅（愛知大学）